
『Empty Heart』

かむいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Empty Heart』

【Nコード】

N0919F

【作者名】

かむいる

【あらすじ】

世界には、あまりに特異な力を持つものたちがいる。人知を超えた力、人ならざる力、世界を変えてしまう力……。それらを操り、行使しするものたちを人々は「異種」と呼び、恐怖の対象としてその存在を恐れる。秋山朱音は普通の高校に通う二年生。そんな彼女が紡ぎだす物語が今、その幕を開ける。

「正義とは、己が力なり」 episode 1

あきやま・あかね
秋山朱音は現在、十数年間生きてきた人生の中で最上級ともいえる苦境に立たされていた。

頭を抱える。けれども浮かんでくる思考はとりとめなく、明確な形を持つてすらいない。

天を仰ぎ見る。しかし見えるものは薄汚れた天井と蛍光灯だけで、今にも押し潰されそうな心境をさらに悪化させる効果しかなかった。
「やばい……」

ぽつりと小さく呟く。それが意外に響いたせいか、教壇に立つ教師の視線が朱音へと向けられた。朱音は慌てて口をつぐみ、いそいそと眼前にある紙切れへ意識を集中させた。並んでいる文字列をゆつくりと読む。しかし理解できる部分が半分程度しかなく、これ以上読み進めることは朱音にとって拷問に近い苦行であった。

手に持った鉛筆をいったん手放す。まずは落ち着こうと、大きく深呼吸をした。焦りつつあった神経が丸みを帯びていく。大丈夫だ、落ち着け。朱音は自分にそう言い聞かせ、再び目の前の文字列と対峙を試みる。

「……うう」
分かつてはいたのだ。一つも勉強しない奴が、テストで点を取れるわけがない。

勉強とは努力の結晶体のようなものである。磨けば磨くだけ輝きを増し、洗練すればするほど美しく見える。そこに妥協を挟むことで結晶体はくすぶり、まるで汚い石のように黒ずんでいく。そして世の中はその結晶体を輝かせた者にこそ栄光を授ける。ゆえに学生は勉学に精を出すのだ。努力は報われるという格言もある。

つまり勉強とは、やればやっただけ結果が出るということ。それを逆さに言いかえれば、勉学を疎かにするものはそれ相応の結果しか出せないということなのだ。

そう結論づけて、朱音は嘆息した。やればできる。しかし勉強の勉の字すら手を付けなかった自分が、定期試験という難易度の高いものを破れる道理はなかったのである。それを理解した朱音の取るべき行為はただ一つだった。

「……寝よう」

テストは白紙。かろうじて名前は記入してあるが、それ以外は見事なまでに白で埋め尽くされている。

教室の壁にかかっている時計に目をやる。時刻は九時三十分。終了時刻まで睡眠をとることに決めた朱音は、ゆっくりとその体を机の上につぶせた。

かりかりという鉛筆ないしシャーペンが走る音が聞こえてくる。それが妙な子守唄のような効果を生み出したのか、朱音の意識は数分ともたずに深いまどろみの中に沈んでいくのだった。

本日付けですべてのテスト科目が終了した。

帰宅していく生徒たち、またテスト休みのため停止していた部活動を開始する生徒たち、彼らの表情は憑き物がとれたように晴れやかで、健やかな笑顔を浮かべている。緊張した日々の反動か、教師

たちも柔らかな空気の中で談笑にふけっており、学校全体の雰囲気
がどこか弛緩したゴムのようならしなさをたたえているようだった。

しかしそんな浮かれ気分に満ちただただ中、それと正反対の表情を
した女生徒が一人、肩を落としてとぼとぼと歩いていた。

「……ありえない」

ちょうど校門を通り過ぎたあたり、秋山朱音は憂鬱そうな表情を
浮かべながら、ぼつりとそう言い放つ。その声はひどく暗く、今に
も倒れこみそうなほどに沈みきっていた。そんな朱音に対し、隣を
歩く男子学生は冷ややかな視線を送りつつ、肩をすくめながら言い
切る。

「勉強を怠ったお前が悪い」

「……哲也、うつさい」

「うるさくて結構。陰気くさいお前よりましだ」

冷酷かつ残酷、それでいて至極真つ当な正論をぶつける学生の名
は、黒鉄哲也である。くろがねてつや朱音とは小学生の時から
の友人で、今でも同
じ高校、同じクラスという腐れ縁を続けていた。

短く飾り気のない黒髪、冷静かつ知的さを感じさせる端正な顔立
ちは、とても高校生とは思えない雰囲気をもし出している。身長
は高く、女子の中では高身長の朱音でさえ、哲也の顔を見るために
は首を傾けねばならないほどだ。勉強に関して言えば哲也は非常に
優秀であり、定期試験では常に上位に食い込む。教師や周囲の人間
たちからの信頼も厚く、まさに「優等生」という単語がふさわしい
男である。

朱音は他人事のような哲也——実際、他人事なのだが——を恨め
しいと言わんばかりに睨みつけ、大仰な声を上げた。

「ああ、もう最悪っ！ 追試はほぼ確実だし、バカ哲也は嫌味ば
っかり言っし」

「追試は自業自得、そして馬鹿はお前だ」

「うがあっ！ やかましいなあさつきから！ 傷心中の乙女相手に

慰めの一つも言えないの!？」

「慰めじゃ何も変わらないからな」

「変わるのっ! 少なくともあたしにとってはず」

対する秋山朱音という人物は、明朗快活を絵に描いたような清々しい女子学生である。表情は非常に豊かで、喜怒哀楽の差がはっきりと分かる。少し赤みがかった髪の毛は肩程度まで伸びており、瞳は大きく、一本筋の通った凛々しさを感じさせる顔立ちは少女というよりも、むしろ青少年と揶揄してもおかしくはないだろう。そして明るく元気で男女関係なく気さくに付き合える朱音は、クラスの中で中心として人望を集めていた。

しかし学生の本分である学業は、隣を歩く哲也と正反対の様相を呈している。成績は下から数えたほうが上から数えるよりも何倍も早く、赤点取得者の常連であり、毎度のことながら今回も赤点のオンパレードにより追試を受けなければならないだろう。そんなことを一年生の頃から続けていた朱音は教師たちからは「問題児」として扱われることも多かった。

人には向き不向きがあるのよ、と朱音は口をとがらせながら言い放つ。

「向き不向きは確かにある。だが、お前は単に怠けていただけだろう?」

「いいや、あたしに勉強は不向きね。間違いない」

「たとえ不向きでも努力次第で乗り越えられるレベルだ。なんなら俺が教えてやってもいい」

「謹んで遠慮するわ! あんたと一緒に勉強するなんて二度とゴメンよっ!」

両手を前に突き出し、完全拒否の意思を明示する。朱音の眼は真剣だった。

朱音がここまで拒絶するのには理由がある。というのも、昔の出来事に起因していた。

中学在学中、朱音は自身のあまりの成績の悪さを嘆き、最終手段

として哲也を頼るという選択肢を選んだことがあった。哲也も快く朱音の依頼を受けたのだが、いかんせん彼の性格は「他人に厳しく自身にはより厳しく」であって、それは勉強面においても揺るぐことはない。朱音は自分から言い出した手前、簡単に投げ出すわけにもいかず、地獄の試験期間を過ごさなければならぬ羽目になったのだった。

あの日々をもう一度繰り返すくらいなら、甘んじて追試を受けよう。哲也との勉強で得た結論は、まさにそれだけであった。

「勉強なんていいのよ。人生に必要なのは、生きるための実践的な知恵よっ」

「それは否定しないが、お前にその『生きるための実践的な知恵』ってものが身に付いているとは到底思えないわけだが」

「バカ言わないでよね。いろいろあるわよ、そんなの」

「たとえば？」

「えっと……五百円で三日間過ごす方法とか、犬とか猫がなつく動きとか、腹筋の効率いい鍛え方とか」

指折りでいくつかの例を紹介していく朱音。彼女の言葉には冗談らしき響きはなく、はたして朱音は大真面目なのだった。

哲也は手を額に当てて首を振る。あたかもひどい頭痛が襲ってきたような仕種だ。

「……真面目に聞いた俺が馬鹿だったよ」

「と、とにかくっ」

何か失態を犯したのかと焦った朱音が思い切り不自然な会話の転換をする。哲也もこれ以上、朱音の学業について言及するつもりはないらしく、とりとめのない朱音の会話に耳を傾けていた。肩を並べて帰るといふ、まるで甘酸っぱい青春物語のページのような光景も朱音と哲也にとっては親しみ慣れた習慣であった。朱音がしゃべり、哲也が聞く。その関係は小学生の頃から変わっていない。

二人の帰路はそれほど遠くなく、十分も歩けば別れの十字路にたどりつく。

「あたしは宗さんの所に行くけど、哲也は？」

「今日は家の用事がある。まあ用事といっても、爺様じいさまの暇つぶしに付き合うだけだが」

「あの堅物爺さん？」

朱音はぎよつとして目を少し見開いた。

まだ二人が小学生の時分、朱音が哲也の家で悪さをしたことがあった。その時に叱られた相手が朱音の言う『堅物爺さん』であり、哲也の祖父にあたる人物だ。厳格で物々しく、まさに古風の代名詞といっても過言ではない。

哲也の家系は古来より由緒ある剣道の名家で、そういったある種の「堅苦しさ」が美德とされている節がある。朱音はその「堅苦しさ」が好きになれず、哲也の祖父に対しても多少の苦手意識があった。

「そういうわけで宗一郎さんの所へは行けない。すまないな」

「別に謝る必要はないけどね。んじゃ、また明日」

「ああ」

右手をかざして、哲也は十字路を右折していった。

朱音は別れの挨拶のあと、十字路をまっすぐ進む。その足取りは少し軽かった。

本日は試験終了日のため、まだ日は高い。天を仰ぎ、空を見すえる。青い空がまるで自分を祝福してくれているかのように澄んだ色を映し出しており、朱音はさっきまでの陰鬱な気分が吹き飛んでいくような気がした。

「勉強なんてど〜でもいいよねっ」

そうして目指す先——如月宗一郎きげん・そいちろうの自宅へ向け、朱音は元気に走りだした。

「正義とは、己が力なり」 episode 2

哲也と別れた十字路から約十分が経過していた。普通の住宅街と
いった町の風景はがらりと変わり、物静かな寂れた町はずれといっ
た場所である。

朱音が住むこの町——白樺町しろかはちょうは、東に移るほど町は発展し、西に
行くほど廃れていくという特殊な形態を呈している。町の東部は日
本の中でも有数の都市としてその名を世間に馳せているものの、西
部はどこの廃墟とも知れない建築物が多く住所不定者の寝床となっ
てしまっている個所もあるほどだ。白樺町とは、そういった明と暗
を内包した矛盾を孕んだ町なのである。

そんな荒廃した西の町、その一角に如月宗一郎の自宅があるのだ。
閑散とした道を朱音は一直線に進んでいく。哲也はともかく、朱
音はほぼ毎日と言っていいほどこの道を行き来していた。もちろん
宗一郎の家へ行くためだ。すでに人の気配はほとんどなく、周囲を
見渡しても朱音以外の人間を目視することができなかった。

しかしこんな光景ももう慣れっこである。朱音は変わらぬ歩調の
まま、町の西へと進んでいった。

そして目的の家が視界に入り、朱音はますます歩く速度を上げた。
その家自体はとても古く、まるで幽霊屋敷と言われても否定できな
いほどに家全体が傷んでいた。表札などの住居者を示すものもない。
おそらく初めての来訪者にとって、本当に人が住んでいるのかと疑
問に思ってしまうだろう。

しかし勝手知ったる他人の家、朱音は躊躇ちゅうちゆなくオンボロ家の玄関
を開いた。

「お邪魔しま〜すっ」

元気な声を出し、家の奥にいるであろう人物に自分の来訪を告げ
る。けれども返事はなく、静寂が家を支配しているようだった。朱

音は首をひねり、ささつと靴を脱いで家に上がりこんだ。

家の中の様子は、家の外観と比べると非常にきれいなものだ。掃除はしっかり行き届いているし、無駄な荷物やごみも処理されている。というのも几帳面な哲也の手によるものがほとんどで、もしそれがなかったら、おそらくこの家は立派なごみ屋敷として顕在していたであろうことは間違いない。

適度に整理された廊下を通り過ぎて、朱音は家主がいる部屋へ向かった。そして勢いのまま、その部屋のドアもあっさりと開ける。そして部屋に入り、一言。

「……うわぁ」

絶句にも似た驚嘆の声。

朱音の視界が映した部屋の光景は、まさに地獄絵図であった。てんでばらばらになった紙やら何やらが部屋中に散らばり、いろいろな機材が所狭しと随所に放り出され、カップラーメンなどのインスタント系の入れ物が部屋の片隅に鎮座し、まるで今にも害虫が湧き出しそうな秘境の地といった表現が似合う部屋の様相。

そしてその部屋の中心、くたびれた白衣を着こんだ男が一人、机に突っ伏したまま寝入っていた。

はあと一息をつき、朱音は足の踏み場に気を付けながらゆっくりと部屋の中を進んでいく。

「……宗さん」

「……」

朱音が静かに声をかけるも、反応はない。

今度は少し大きな声を出して、男の名前を呼んでみた。

「……宗さんっ」

「……う」

「宗さん？」

「は……腹、減った……」

脱力しきった声でそう言い、男は憐みを乞うような眼で朱音を見つめてくる。

何か食べ物を…。

男の無言なるその主張をくみ取った朱音は、呆れ顔で肩をすくめて、その足を台所へと向けた。対する男は朱音の背中に向けて「ありがとう」と情けない口調でその後ろ姿を見送っていた。

その男——小汚い家屋に住まい、古びた白衣に身を包んだ男の名前は、如月宗一郎である。秋山朱音にとって、何よりも大切な場所の中心にいる人物だった。

「いやあ、生き返ったあ。朱音ちゃんの料理はおいしいなあ」

用意した食事を平らげ、満腹感からくる幸せそうな笑みを浮かべながら、如月宗一郎はそう言った。

食事とはいったものの、朱音が用意したものは台所の棚に保管してあったインスタント系のラーメンで、控え目にも「朱音の料理」と言える代物ではない。しかし人間とは褒められると嬉しくなるものらしく、朱音は得意げに胸をのけぞらせた。

「ふっふっふっ。感謝してよね、宗さん」

「もちろん。ありがとう、朱音ちゃん」

残りのスープを飲みほし、宗一郎はぷはあっと大きな息をついた。

食事開始からおおよそ三分で完食、それだけ空腹だったという証でもあるのだろうが、動けなくなるまで食事をしないというのも常識的に考えられるものでない。しかし宗一郎をよく知る朱音にとって、むしろこの光景は見慣れたものだった。

何か没頭するものがあると食事を抜くのが当たり前。睡眠すら二、三日もとらずに生活することだって珍しくはない。幼い頃から宗一郎と付き合いのある朱音だからこそ、彼の非人間的ともいえる生活スタイルにも順応することができたのだった。

一通りの片付けを済まして——といっても空っぽになった容器を隅へ放り出ただけだが——朱音はそこらじゅうに散らばっている書類や機材を端へどかしてから、自分が座る場所を確保した。宗一郎は自分が手がけていた書類を整理し、必要なものは手元に、必要ないものはごみ箱へ投げ捨てた。しかし投げたごみはてんで見当違いの方向へ飛んでいく。こうして部屋が徐々に汚くなっていくのだ。「あたしが言うのも何だけど……この部屋を見たら、哲也がキレちゃうよ?」

「あはは…」

「いや笑う場面じゃないし」

「いやはや掃除をしてくれる哲也くんには悪いとは思ってるんだけどねえ、つい癖で」

「まあ、あたしもどちらかといえば宗さん寄りだけど。というか哲也の奴が几帳面すぎね。細かいし、頑固だし、しかも口うるさいし。男はもつところ、ばぁんと器の大きさを勝負するべきよ」

帰り道で小言を言われた腹いせか、朱音はうつぷんを晴らすごとくまくしたてた。

宗一郎は頭をかきながら微笑し、朱音の愚痴を静かに聞いていた。その姿はまるで父親のように大らかで、人を包み込むかのような温かさを感じさせた。

朱音と宗一郎の関係は、あてい有態に言えば子供と保護者の関係に等しい。幼少の頃に両親を亡くした朱音を保護し、その生活の面倒を見

てきた人物が宗一郎であり、朱音は宗一郎のことを実の両親のように慕っている。血は繋がっていないくとも、二人の関係は血縁関係のある者たちよりも深いところで繋がっていると朱音は感じていた。それは宗一郎にも同じことが言えた。

「聞いてよおつ、哲也つてばあたしのことバカ呼ばわりするんだよ！　ちよびつと頭が良いからつて調子に乗つてさあ、いつか哲也を見返してやりたいっ！　ねえ宗さん、何かいい案ない？」

「そう言われても……哲也くんには僕も頭が上がないし」

「そこを何とかっ」

「あはは……じゃあこういうのはどうだい？　彼の苦手分野を突いて、鼻をあかすとか」

「おおつ、それいいかも！　ようし、じゃまずは哲也の苦手分野を探そうっ」

朱音は手の平を叩いて顔を輝かせる。哲也を見返すため、彼の弱点となりうる部分を懸命に探し出そうとした。

まず勉強に関して。少なくともそこに検討の余地はないだろう。

主観的、客観的に考えても朱音が哲也を上回れる部分は何一つとしてありえない。それは朱音自身も重々承知しているらしく、彼女の思考の中では学業関係での勝負は完全に抹消されていた。

では運動ではどうだろう。朱音の身体能力は群を抜いて高く、それはまさに彼女のアイデンティティであるとも言えた。しかし対する哲也も朱音に負けず劣らず運動神経が良く、一発勝負において絶対に勝ちきることができるかと問われれば、自信を持って領けれないのが現状である。

ならば朱音が哲也を相手にして、彼の鼻をあかすことのできる分野とは何であろうか。そして十分程度を費やし、朱音はある結論にたどりついた、

「あ、あれ……あたし、哲也に勝てるものがない？」

正確には「圧勝できるもの」であるが、その結論は朱音の心を抉ってしまったらしい。先ほどとはうって変わった陰鬱な表情を浮か

べて、朱音は両手膝をついてうな垂れた。

「まあまあ朱音ちゃん。人にはそれぞれいいところがあるものさ」

「それ全っ然、慰めてないよ……」

「悪い意味じゃなくて。他人のいいところを羨むより、自分のいいところを誇ろうってこと」

「……じゃあ、あたしのいいところって何？」

「元気なところとか」

「他には？」

「明るいところとか」

「……他には？」

「活発なところとか」

「………他には？」

「……あはは」

「笑って誤魔化されたっ！ しかも同じようなことしか言われてないしっ！ いいよもうっ、あたしなんか元気だけが取り柄の馬鹿人間ですよっ！ それで何か悪いか、こんにやろうっ！」

くわっと眉を吊り上げて朱音が咆哮をあげる。その目には怒りと絶望、そして若干の悲しみが織り交ざっていた。

宗一郎は不意の朱音の奇行にも驚くことなく、優しげな表情で微笑していた。朱音はごろりと仰向けに転がり、ふて腐れたように唇を尖らせた。しかしすでに朱音の怒りは消化されていた。まるで我が子を見守るような宗一郎の柔和な顔が、朱音の逆立った神経を多少なりとも宥めたようである。

そこでふと、床に転がっているある物体が、仰向けになった朱音の目にとまった。

「宗さん、これ何？」

手を伸ばして、そのある物体を掴む。

それは球体の形をしており、白く、手の平サイズで、まるで子供がなめる飴みたいだと朱音は感じた。

「ああ、それは『M・D・』《マッド・ドロップ》——世界を狂わ

す、悪魔の飴玉と」

「正義とは、己が力なり」 episode 3

「世界を狂わす、悪魔の飴玉…?」

朱音は宗一郎の言葉を復唱し、手に持った飴玉らしきものを光にかざして見入る。

「そう。それが今、僕が行っている調査の重要な物証だよ」

マッド・ドロップ、通称『M・D』と呼ばれている飴玉は、現在進行形で日本を騒がしている新種の麻薬である。

従来の麻薬は注射によって体内に送り込むもの、あるいは粉状の麻薬を鼻や口から吸引するものがほぼ多数を占めている。その摂取方法が主流であることは変わっていない。しかし常に注射器を携帯しなければならぬ煩雑さ、そして吸引では効果が薄まってしまふこと、それらは麻薬常習者たちにとって改善すべき点であった。持ち歩きが容易で、摂取に時間がかからず、それでいて最大限の効果を得ること。それらを全て満たす考案こそ、麻薬を飴玉の形に凝縮することであったのだ。

麻薬を飴玉状にすることで持ち運びは非常に簡易になり、摂取方法はそれを口の中へ入れるだけである。また効果にいたっては、常習者たちの想像をはるかに超える出来となっていた。一度麻薬を水に戻し、それらを丹念に濾過、抽出することでより高純度の麻薬を作り出すことに成功したのだ。その効果は従来のものと比べて約十倍、ごく僅かな摂取量で人間を廃人へと変貌させることのできる「悪魔の麻薬」となったのである。

そして、その新種の麻薬は現在、その開発元である日本を中心に広がっている。政府もこの危機的状况を打開するため、その名を世間に公開した。それがより大きな波を呼ぶこととなり、日本全土で『M・D』は世界を狂わす麻薬と恐れられているのだった。

「『M・D・』——マッド・ドロップ。その名前のとおり、狂った飴玉だよ」

「ほええ……」

宗一郎の説明を聞き、朱音は間の抜けたような声を上げた。

世界を狂わす悪魔の麻薬。そう呼ばれているものを、まさに今、自分が手にしている。朱音は何となく現実離れた今の状況に目を丸くし、ただ純粋な好奇心でもって眼前の『M・D・』を眺めていた。

普通に見た限り、これを麻薬と思える人間はいないだろう。その見た目は普通の飴玉に他ならなかった。薄荷はっかかヨーグルトか、想像できる味はそのあたりのはず。もし宗一郎のいない間にこの飴を見つけていたら、何かの間違いで食べてしまっていたかも。朱音はそう想像し、少し体が恐怖に震えてしまった。

朱音が食い入るように『M・D・』を見つめていると、宗一郎がぽつりと言いつつ。

「ああ気をつけて。それを直に持つてると、溶けた部分から出た麻薬が皮膚から浸入しちゃうから」

「そつ、それを早く言つてよっ！」

慌てて朱音が『M・D・』を放り投げた。飛んでいく飴玉は床に落ち、ころころと目的地もなく転がっていった。

それを見た宗一郎は声を殺して笑った。

「大丈夫、大丈夫。たかが数分程度じゃ何も害はないから。ただ絶対に食べたりしないように。一回でもやつちゃうと、最初は天国、あとで地獄だから」

「どうということ？」

「反動がもの凄いつてこと。従来の麻薬の十倍の効果だから、依存性も禁断症状も十倍になっているのさ。それだけの効果だから、一度でも食べるともう後戻りはできなくなる。お金が尽きるまで、もしくは体が朽ち果てるまで『M・D・』から抜け出せなくなってしまう」

「そりや恐ろしい……」

「でも禁断症状を耐えられる強靱な精神力があれば平気だけどね。試してみるかい？」

「謹んで遠慮するわっ」

「あはは。そうだね、それが賢明だ」

宗一郎は床に落ちた飴玉を拾い上げ、手で汚れを軽く払った。

まるで本当のお菓子みたいだ。朱音は先ほどの説明を受けたにもかかわらず、いまだに目の前にある『M・D』の恐ろしさを実感できていなかった。こんな安っぽそうなものが世界を狂わす、と言われてもすぐに理解できる話ではなかったのだ。

そこで宗一郎は、そんな朱音の様子にこそ現在の『M・D』が流行っている理由があるのだと言った。

「見た目はただの飴玉、それこそが落とし穴なんだよ」

朱音が首をひねる。

宗一郎は「つまり」と前置きし、説明を続けた。

「誰もこうしたお菓子を幼少の頃に食べる。飴はおいしいもの、甘いものという認識が埋め込まれるんだ。人間は未知を極端に恐れるけど、既知のものは驚くほどあっさりと受け入れてしまう。テレビでCMを流している商品とそうでない商品、どちらがより売れるのかを考えれば、分かりやすいかな」

「思い込み……みたいなものってこと？」

「似たようなものだね。麻薬は恐ろしいものだということは世界共通の認識。けれどもその十倍以上の効果を持つ『M・D』がこれほどまでに流通している理由は、まさに飴玉が与える『お菓子』という先入観だと僕は思う。その証拠に『M・D』は今までにない低年齢の層にまで触手を伸ばしている」

宗一郎は手元にある書類を取り、それを朱音に手渡した。

その中身を見た途端、朱音の表情が曇る。文字と数字の羅列。それが本日のテストを思い起こさせるらしく、内容に目を通さずに宗一郎へ押し返した。

そんな朱音の様子がおかしかったのか、宗一郎はくすくすと微笑し、代わりに書類の内容を朱音に読み上げた

「僕の調べでは、少なくとも十数人の小学生が『M・D』のせいで命を落としている。主な死因は『M・D』の強力な効果に幼い身体がついてこれられないショック死、そして反動の禁断症状の苦しみによる心不全、あるいは苦しみに耐えきれず自殺が全体を占めている」

「小学生が麻薬って……」

「驚いただろう？ 世の中の低年齢化は事実だけど、さすがに僕も信じられない気持ち強いね」

「ということは中学、高校の被害者はもっと多いってこと？」

朱音の言葉に宗一郎は苦々しく頷いた。

小学生ということは大きくても十二歳前後ということだ。そんな身体も心も未熟な彼らが、どうしてそんな危険なものに手を染めるのだろう。朱音は悶々とした思考を繰り返すも、まとまった結論に至れないでいた。

「幼い頃は誰もが好奇心の塊だからね。しかも禁止されている行為となればなおさら」

宗一郎の言葉に、結局はそういうことなのだろうと朱音は感じた。禁忌を破る背徳感。それは自身に降りかかる不幸をかすめさせるほどに魅力的なものだ。中学生になれば喫煙する者、高校生になれば不徳行為に及ぶ者、そうした行動への好奇心は誰もが持つ動物の本能だろう。そこから多くを経験し、個人としての境界を線引きする。ここまではいい、ここからは駄目、といった具合にだ。

しかし、小中高生はその大元の経験値の少なさゆえに一度足を踏み入れた世界から抜け出せなくなることも多々ある。だからこそ大人たちは彼らを守るため、規則を作り抑制しようとする。そして彼らは大人たちの規則から抜け出そうと躍起になる。まさに融いたこつこであった。

「で、僕が独自に調べていくうちに分かったことが二つある」

宗一郎がそう言い、指を二本立てた。

しかし朱音が宗一郎を制止する。

「ちよつと待った。独自つて、まさか宗さん……」

「ん？」

「あまり聞きたくないですけど……もしかしてまた依頼もなしに事件を調査してるんじゃない？」

「そうだけど？」

宗一郎が「何を今さら」といったような顔でそう言い返した。

宗一郎の仕事は、主に依頼された仕事をこなすことで代金を得るというものだ。名目上、如月探偵事務所と名乗ってはいるものの、依頼という依頼はほとんどやってこない。白樺町西地区という立地に恵まれていないこと、探偵事務所としての実績がほぼ皆無であること、そもそも宗一郎にやる気がないことなど——彼の仕事が賑わっていない要因を挙げればきりないが、要するに宗一郎は事務所を経営しており、その社長を務めているというわけである。

そういった仕事を生業としている宗一郎は、時にこうして金銭とは関係なしの事件を調査することがある。そこに明確な基準があるわけではないが、困っている人がいるという理由で動くものがほとんどだった。

朱音はがくつと肩を落とし、深いため息をつく。その様子は落胆というよりむしろ、宗一郎に呆れているといったほうが正しかった。「いい人というか、人がいいというか、暇人というか……」

「あはは。気にしない、気にしない」

宗一郎は曖昧に笑い、一つ咳払いをしてから話題を戻した。

すでに宗一郎は動き出している。自分が騒いだところで彼がこの件を途中で放り出すはずもないと、朱音は諦めたように肩をすくめて、宗一郎の話に耳を傾けた。

宗一郎は指を一本立て、ゆっくりと語りだす。

「分かっていることの一つ目。『M・D』を流通させている組織の支部が、ここ白樺町にある」

「ちょっと……そんな話、全然耳に入ってきてないよ」

「今『M・D・』が流行っている地域は白樺町の東部。朱音ちゃんに通ってる学校は比較的西寄りだから、まだそんなに大きな被害は出ていないだろうね」

宗一郎の言葉に、朱音は眉をひそめた。

最近の学校はいたって普通、今までと何の変りもない平穏な日々が続いていたはずである。少なくとも朱音の耳に『M・D・』などという聞き慣れない単語は入ってこなかった。朱音の交友関係は広く、そういった情報をいち早く仕入れてくる友人もいる。しかし誰からもそんな話は聞いたことがなかった。

「うちの学校じゃ『M・D・』なんてもの、極々一部しかやってないんじゃないかな。それ以外は今までどおりだし、いたって平和だと思う。あ、いや平和じゃなかった。定期試験のせいであたしの平和な生活は……定期試験……？ あ、ああっ」

——定期試験。

朱音は目を見開き、ここ最近の学校生活を省みた。

定期試験期間は一週間ある。そして試験勉強期間として、さらに一週間の猶予が与えられていた。周知のとおり、朱音の学業は芳しくない。そんな朱音は勉強期間の頃から試験を憂鬱に感じており、そればかりを考えて頭を抱える日々を送っていたのだった。

当時、試験に悩んでいた朱音が、友人らの話に意識を向けていたのか、それとも聞き流していたのか。今となっては分からない事だが、少なくとも朱音が情報を聞き漏らすという可能性があったことは事実だった。

「定期試験……あれのせいで最近、学校の情報に疎くなってた……」

「もしかしたら『M・D・』が流行りだしたのも定期試験が引き金かもね。麻薬は一時的とはいえ悩みを完全に忘れさせてくれるし、精神が不安定な状況じゃ間違っって手を出してしまう可能性も否めない」

「最悪だ……っ、試験なんかにつつつ抜かしてりゃ世話ないよ……」

「いや試験にうつつ抜かしちゃ駄目だよ。下手したら進級できなくなっちゃうからね」

朱音が焦り熱くなっているのを見抜いたのだろうか、宗一郎は微笑しながらそう言った。朱音もその笑顔を見て肩の力を少しだけ抜き、息を整える。自分が知らないうちに過呼吸状態だったらしく、落ち着いて深呼吸を繰り返した。

そして落ち着いたところで、宗一郎が二本目の指を立てた。

「分かったことの二つ目。この町にある支部の支部長。名前は石本^{いしもと}大悟^{だいご}。僕もまだ詳しい情報はつかんでないけど、その男がこの町で『M・D』をはやらせていることは間違いない」

石本大悟。聞いたことのない名前だった。

宗一郎は調査書を人差し指でピンとはじき、眉根を寄せる。

「なかなか強引な男らしくてね。最近になって頭角を現してきて、東部の裏側じゃ彼に逆らえる人間も少ないって話だ」

「なるほど……」

「そこで朱音ちゃん、折り入って頼みが――」

「おっと、それ以上は言わなくても分かるわ。何年の付き合いだと思ってるのさ」

朱音が宗一郎を右手で制止する。

ニツと朱音が口元を上げると、宗一郎も同じようにして笑う。無言の意思疎通。

「あたしに調べて来いっていうんでしょ、その石本大悟ってやつを」
朱音はすくつと立ち上がり、力強く親指を立てた。

その時の表情はどこか、生きる気力に満ち溢れた人間が浮かべる充実した凛々しさをたたえているようだった。

「無理だけはしないようにね」

宗一郎の忠言に軽く頷き、朱音はまるで風のように家を飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0919f/>

『Empty Heart』

2010年11月3日02時30分発行